

ARIAN ROSE PRESENTS



NOVEL ANTHOLOGY

わたし、
**自分の力を
信じていますの！**

強か令嬢たちの華麗なる返り咲き

Authors

一分咲
高杉 なつる
倉本 綺
ふまさ

Illustr.

鈴ノ助

大人のためのご褒美ノベルアンソロジー



大人のためのご褒美ノベルアンソロジー
**わたくし、自分の力を
信じていますの！**
～強か令嬢たちの華麗なる振り返り～

Contents



『破滅した悪役令嬢は魔王と結託する』

一分咲

003



『ないものねだりはやめました！』

～竜医師クロエの幸せな春～』

高杉 なつる

079



『わたくしを追い出して、 ただで済むと思いましたが？』

倉本 綺

149



『あなたには、この程度のこと、 だったのかもしれませんが。』

ふまさ

223

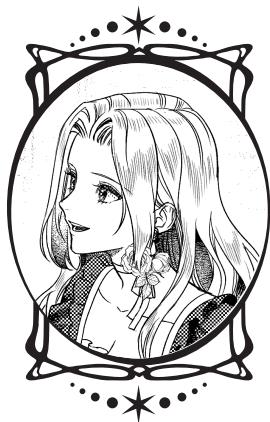


Characters

＊登場人物紹介＊

破滅した悪役令嬢は 魔王と結託する

一分咲



追放された悪役令嬢

**アンジェリカ・
ベイトソン**

＊.....＊

無実の罪で魔王城へ
追放されたはずが、
なぜか魔王の師(?)に。



呪われた魔王

**マクシミリアン・
アールデルス**

＊.....＊

美貌の魔王。
だが世間の認知と実態には
大きなズレがあるようで？

かつての澄み切った青空を失い、澱んだ昼と濁った夜しか訪れなくなってしまった、ルシャヴィータ王国。

その筆頭公爵家の令嬢の名前は、アンジェリカ・ベイトソンという。

乙女ゲーム『閻空のルクス』——略称『閻ルク』に登場する悪役令嬢の彼女は、輝くようなブランドヘアと碧い瞳を持ち、美人だけれど絵に描いたような意地の悪い顔立ちをしている。

悪役令嬢アンジェリカは、プレーヤーであるヒロインを虐め尽くした罰として魔王城へ送られ、破滅するのだ。

しかも、ゲームのナレーションによると魔王城に辿り着くことすらできず、雷に打たれて己の行いに対する神の裁きを受けるのだとか。

かわいそうだけど、まあ、悪いことをしたら当然だよな？

それが、私自身のことだと気がついたのはつい数秒前。

急停車した荷馬車の荷台で頭を打ち、自分が前世は日本人で、ここは乙女ゲームの世界だと認識した直後のことだった。

なお、公爵令嬢なのになぜ荷馬車の荷台に乗っているのかというと、まさに件の罪で輸送されている真っ最中だからです。

「待って……アンジェリカが私のことだっていうなら話は変わってきますけど!？」

情けない悲鳴が荷馬車の中にこだまする。

現状、行き先はもちろん魔王城。外は酷^{ひど}い雨。この荷馬車が止まってしまったのは、雷雨に驚いた馬が動けなくなってしまったからのようだ。

そしてこの雷雨、たぶん私を裁くやつ。思った以上に死が近い。

全てを把握した私は、いまだ動き出さない荷馬車の荷台で立ち上がった。

「どうしてこんなことになってるの!? だけど死ぬのは嫌! なんとかしなきゃ」

前世、パティシエだった私は、たぶん職場のオーブンの爆発に巻き込まれて死んだのだと思う。

だからこれが二度目の人生なわけだけれど、前世の記憶を思い出して混乱しているうちにまた死ぬのは嫌だ。それぐらいの生存本能はある。

あわあわと馬車の荷台から這^はい出た私は、御者に声をかけた。

「ねえ! 馬も動けないみたいだし、魔王城への送迎はここまででいいわ?」

けれど、王城から私の輸送について厳しく言われているらしい二人の御者は、必死の形相の私を見て、顔を見合わせてから首を振る。

「それはできない。王太子の婚約者、サリナ様を殺そうとしたあなたの罪は重罪だ。流刑の地、魔王城の前まで確実に送り届けるように仰せつかっている」

「うっ」

まあそれはそうだよね。

悪役令嬢のアンジェリカは、特待生の平民として学園に入学してきたヒロインのサリナを虐め尽くし、殺人未遂に問われた結果、『死刑』の次に刑が重い『魔王城送り』になったのだから。

けれど、死刑の方がまだましかもしれない。

だって、これまでに『魔王城送り』になって生きて戻った者はいないのだ。

どんな目に遭うのかわからない未知の場所へ流されるよりも、潔く死刑にしてもらった方があっさり死ねて楽な可能性すらある。

けれどできることなら主張したい。

そもそも、その重罪自体が嘘だということをも！

確かに、婚約者がいる貴族令息に積極的にアプローチしていくサリナを咎めたし、貴族的なマナーが全然わかってないみたいだったから、教えてあげたりもした。

だけど、それが殺人未遂ですって……!?

そもそもその王太子、元はアンジェリカの婚約者だったからね!?

略奪したのは向こうだから！

それなのに、突然、公衆の面前で婚約破棄をされ、身に覚えのない殺人未遂の罪で捕らえられ、家族も誰も味方してくれない、つてもものすごい絶望でしたけれど!?

……という関係ないあれこれで言い争っている余裕はなかった。今は命が優先だ。

不名誉な濡れ衣を全部呑み込んだ私は、ドレスの袖を軽く捲り、二人に見せる。

「大丈夫よ。だって、私にはこの腕輪が嵌められているでしょう？ この腕輪があるんじゃない、魔法も使えないし魔王城に行くしかないわよ。ね？」

今、私の腕には魔力無効の腕輪が嵌められている。

Characters

＊登場人物紹介＊

ないものねだりはやめました！ ～竜医師クロエの幸せな春～

高杉 なつる



新天地を望んだ竜医師

**クロエ・
オードラン**

＊.....＊

長年疎遠だった婚約者と
向き合う機会を得ること
になり……？



何事にもひたむきな竜の乗り手

**シリル・
オーバン**

＊.....＊

叶わぬ想いを断ち切るため、
新天地行きを決めたが……。

ピーッという甲高い声をあげ、飛竜が空へと舞い上がった。

太陽の光を受け黄緑色の鱗を輝かせ、空を舞う。くると回転し、上へ下へと飛ぶ幼い飛竜を見つめクロエはホッと安堵の息を吐いた。

空を飛ぶ子竜は先日、空中旋回に失敗して木に激突し左翼を負傷してしまったのだ。翼のケガは空を飛ぶことが本能である飛竜にとっては致命傷になりかねないため、とても心配した。けれどその心配は無駄に終わったようだ。

「……ケガは治ったみたいね」

「ですね、良かった」

また自由に飛べるようになって、自分の心配が無駄になって良かった。

「さてと、あの子はしばらく遊ばせておきましょう」

「はい」

竜という生き物は、太古の昔からこの世界で生きている種だ。空を飛ぶ竜、陸を駆ける竜、水を泳ぐ竜と、生活環境に合わせて多種多様に進化し、人とも共存している。

そんな人と共に生きる竜を診察・治療のできる獣医師を、竜医師と呼ぶ。牛や馬などの家畜やペットの診療・治療を行う獣医師の上位資格だ。

クロエ・オードランは、ここオードラン竜牧場の専属竜医師として働いている。

再度空を見上げると、黄緑色の飛竜が飛んでいるところよりも高い空を飛んでいる飛竜の姿が影として見えた。大きな翼を広げ、長い尻尾でバランスをとっているのがわかる。その背中には自身

の乗り手を乗せているのだろう。

「……」

竜の乗り手になることは簡単だ、竜に選ばれればいい。

性別も身分も関係ない、竜自身が選んだ者が乗り手となる。

人が竜に選ばれる年齢は五、六歳の少年少女。

クロエは今年二十四歳になる。もう、竜に選ばれることはない。

「さ、次の仕事に行くよ」

共に働くのはアンヌ、クロエの姉でここオードラン竜牧場の跡取り娘だ。アンヌはクロエが養子入りのオードラン夫妻の愛娘であり、二ヶ月後には結婚して夫と共に新たな牧場主となることが決まっている。

「はい」

「今日は……サン・ジェレ村の子どもたちが来る予定だったね」

牧場にやって来る子どもたちの中から、乗り手に選ばれる子は現れるだろうか？ 竜が無事に乗り手と出会ってほしい、竜は自身の乗り手と出会うことが最上の喜びだから、アンヌはそう言う。

「あ、今日は陸竜の健康診断が一頭入ってるんだっけ？」

「そっちは私が担当します。アンヌ姉さんは顔合わせの方に専念して下さい」

「わかった、お願いね」

飛竜の放牧地から竜舎へと続く小道を二人並んで歩いていくと、幌ほろを被かぶった大型の馬車が牧場に

向かってるのが見えた。馬車からは、軽やかな歌声が聞こえる。

「あら、もう馬車が到着する時間？　急がなくちゃ。……そういえば、あのケガをしてる子の子を見て幼竜舎に連れてきてもらえる？　子どもたちとの顔合わせには、あの子にもいてほしいからお願ひ」

「はい」

返事を聞いたアンヌは、慌てて牧場の正門から真正面にある建物に向かった。

馬車がゴトゴトと進む音、子どもたちの歌声が先ほどより大きく聞こえてくる。

オードラン竜牧場は賑やかで、忙しい一日が始まるうとしていた。

クロエは放牧地に沿うように作られている小道を進み、牧場の隅にある竜舎へと向かう。そこはケガの治療や、健康診断などで外部から預かり一時的に牧場に滞在する竜の専用竜舎である。

現在竜舎の中には一頭の子竜がいる。赤い鱗を持つ飛竜で、一年前に卵から孵った子どもだ。子竜はクロエの姿を見つけ、寝薬の中から「ピーピー！」と可愛らしい声をあげ小さな翼をバタバタと動かしした。

「おはよう。ご飯は食べたね。じゃあ、目を診察して薬をさそう。その後は、兄弟のところへ戻ろうね」

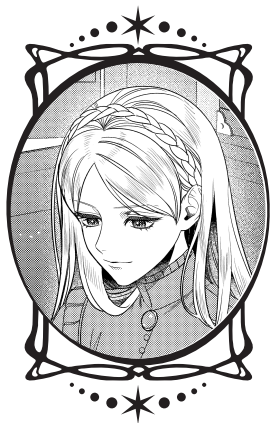
赤い子竜は共に生まれた兄弟竜がいるのだが、先日喧嘩をして兄弟竜に突かれてケガをしてし

Characters

＊登場人物紹介＊

わたくしを追い出して、 ただで済むと思いませんか？

倉本 綺



家を追い出された伯爵令嬢

**アストリッド・
ハリントン**

＊.....＊
聡明で意志が強い。
領地を守るために
行動開始する。



子爵家次男

**ダニエル・
アンブローズ**

＊.....＊
アストリッドの幼馴染。
寡黙だが一途な性格。

「わたくしを追い出すつもりですか？」

アストリッドは震える声で言った。

視線の先には、苦々しい表情を浮かべる二人の男性が立っている。

アストリッドの父であるウィロー伯爵家当主マーヴィンと、弟のエリックだ。二人とも、アストリッドに対する嫌悪を隠そうともしない。

昔からそうだったわ、とアストリッドは心の中でつぶやいた。

父親に優しくしてもらった記憶など一つもないし、エリックも家庭教師がつく頃には、自分を避けるようになっていた。

当主である母が生きていた頃は、母のお気に入りであるアストリッドに対して表立って何かをするようなことはなかったが、それでも父と弟に嫌われていることを、アストリッドは子どもの頃から敏感に感じ取っていた。

父と弟は顔こそ似ていないものの、性格はそっくりだった。勤勉なアストリッドと自堕落な二人は馬が合わず、何かと衝突していた。

そのせいなのか、母が病死してウィロー家当主となった父は、まるで厄介払いのようにアストリッドの縁談を勝手に決めてしまった。相手は、アストリッドの祖父より年上のハリントン伯爵だった。

老齢のハリントン伯爵がこの世を去った後、アストリッドは身の振り方を決めかねていた。

実家に戻れば、父と弟から嫌がらせをされることは目に見えている。けれど、このまま父と弟の

浪費を見過ごせば、いずれウィロー家の屋敷も財産も、すべて人手に渡ってしまうだろう。

迷いに迷った末、アストリッドは一時的に実家に戻ることにした。父と弟の嫌がらせをどうしても耐えられないと思つたら、その時は家を出ればいい、と心に決めて。

しかし、まさかこんな風に家から追ひ出されるとは思わなかった。

実家に戻ってからはほぼ毎日、ウィロー家の傾きかけた財政を元に戻すべく、懸命に努力してきた。今日もすでに、アストン商会の経理担当者と、借金返済についての打合せを済ませている。

それなのに、父からいきなり玄関ホールに呼び出されたと思つたら、これだ。

ここ最近、父と弟が裏でこそ何かを謀っているには気づいていたが、まさかこんな仕打ちを受けるとは。

目の前には、投げ出すように置かれたトランクが一つだけある。落ち着かなきゃ、とアストリッドは深呼吸し、静かに言った。

「この荷物一つを持って、わたくしに出て行けと？」

「不満なら、態度を改めてもらおう。おまえのやりようは目に余る」

ウィロー伯爵家当主マーヴィンは、蔑むような表情を浮かべてアストリッドを見下ろした。

金髪に青い瞳の、若い頃はさぞや美男であつたろうと思われる容姿だが、長年の不摂生がたたつて腹回りにはたっぷりと贅肉ぜいこがつき、瞳は充血して黄色く濁っている。

アストリッドは幼い頃、お父様に似てよかつたわね、と何度も言われたが、それは彼女にとってまったく嬉しいことではなかった。

一般的に美しいとされる父親より、平凡な容姿と言われる母親に似ていたらどんなに良かっただろう。

だがそう言うのと、皆、アストリッドを変わり者扱いした。

美男子の父親より、平凡な容姿の母親に似たかただなんて、おかしい子なこと。そう笑われても、アストリッドの目には遊んでばかりの父親より、女領主として仕事に励む母親のほうが、よほど美しく格好よく映ったものだ。

「父上、無駄ですよ」

マーヴィンの後ろから、茶褐色の髪に琥珀色の瞳をした、パツとしない容姿の青年が口を挟んだ。「エリック」

アストリッドの弟、エリックだった。

アストリッドと違い、エリックは母親によく似ている。本人はそれを苦にしているようだが、アストリッドは子どもの頃、エリックが羨ましかった。

茶褐色の髪は暖かみがあるし、琥珀色の瞳はまるで蜂蜜のように見える。

だが今では、母親と同じ色をしたエリックの髪や瞳を、あまり美しいとは思えない。昔はあんなに羨ましかった髪や瞳が、今は色褪せ、ありふれて見えるのはなぜだろう、とアストリッドは思った。

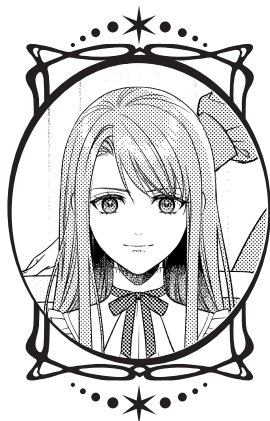
「姉上には、父上を敬う気持ちが欠けているんですから。……いえ、姉上はそもそも、家族に対する情というものがないんです。でなければ、ウィロー家に戻った姉上を快く迎えた僕たちに対して、

Characters

＊登場人物紹介＊

あなたには、この程度のこと、
だったのかもしれませんが。

ふまさ

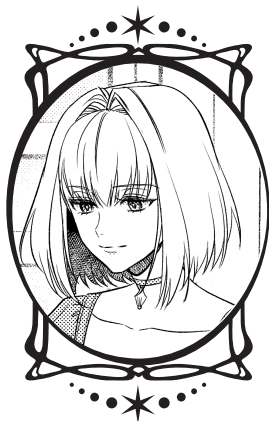


伯爵令嬢

カミラ

＊.....＊

心に決めたら、
行動が早い。



子爵令嬢

バーサ

＊.....＊

明るく、
友達想いな性格。

心から楽しみにしていた、誕生日パーティー。けれどその場合は、信じられないほどに凍り付いていた。

でも。

愉快そうに声を上げて笑う者が、一人、いた。



クルス伯爵家の長女カミラには、親が決めた婚約者がいた。相手は、ブラッド・デルーカ。デルーカ子爵家の次男である。信頼関係で結ばれた父親たちが決めた相手ではあったが、幼い頃より親交のあったカミラとブラッドの間には、確かな絆があった。

「お前の息子なら、安心して我が領土を任せられる」

酒の席で、クルス伯爵はよく、デルーカ子爵にそう言っていた。クルス伯爵に嫡男はいないため、クルス伯爵の跡をいずれ継ぐのは、カミラの夫となる者のつとめだったから。

真面目^{まじめ}で優しいブラッドをクルス伯爵も気に入っていたし、カミラはブラッドと一緒にいる未来を、信じて疑わなかった。

そんなカミラたちの関係に亀裂が入ったのは、二人が共に十六となる年。地元を離れ、王都にある王立学園に通うようになってからのことだった。



それは、カミラとブラッドが王都にやってきて、ふた月ほど経った頃。青い空にある太陽が真上にくる少し前。様々なお店が立ち並ぶ街路を、ブラッドと並んで歩くカミラの目は、好奇心に満ちていた。王都に来てからこれまで、気持ち的にも時間的にも余裕がなかったため、じつくりと街を散策するのは、今回がはじめてだったから。こぢんまりとした、お洒落しゃれで可愛い雑貨店がカミラの視界に入ってきたのは、そんなとき。

「入ってみてもいい？」

指差すカミラに、ブラッドが「もちろんだよ」と朗らかに笑う。小さな頃から変わらない、落ちて着く空感。この人と一緒にいられるわたしは幸せ者ね、とカミラの頬が緩んだ。

カラン。

ブラッドが雑貨店の出入り口である扉を開けると、そこにつけられた鐘が耳に心地よい音を立てた。

「いらっしゃいませ」

出迎えてくれたのは、ふわふわとした金の髪がよく似合う、甘い砂糖菓子のような可愛らしい女性せいの店員だった。

「どうぞ。ゆっくり見ていってくださいね」

はい。と、答えようとしたカミラより先に、ブラッドが口を開いた。

「あ、あの。妹の誕生日プレゼントを探していて」

「まあ、そうなのですね。素敵なお兄様で羨ましいです。でしたら、こちらなどはいかがでしょう」

ブラッドは頬を赤く染め、カミラを置き去りに、店員と二人で会話を始めてしまった。店に並ぶ商品の説明を、熱心に受けるブラッド。その背中を、居心地悪そうにカミラが見つめる。今日の一番の目的が、地元にいるブラッドの妹への誕生日プレゼントを買うことではあったため、ブラッドは彼女に薦められるまま、一枚のスカーフを購入した。

一緒に選んでほしい。そう頼んできたのはブラッドだった。雑貨店に入ろうと言ったのも、その目的があったから。なのに、ブラッドが一度も意見を聞いてくれなかったことが哀しく、また、あからさまに店員にデレデレしていたことに、カミラは素直に腹を立てていた。

「……あの子に鼻の下、伸ばしていたでしょ」

店を出てすぐ、カミラは軽く目を吊り上げた。ブラッドにとっては予想外の怒りだったのか、綺麗にラッピングされた袋を持っていない左手を左右に激しくふり、それを否定していた。

「そ、そんなことあるわけないよ」

「どうだか」

「ほ、本当だよ。隣にきみがいるのに、そんなことするわけじゃないじゃないか!」

慌てながらも必死なブラッドに、カミラは思わずクスリと笑ってしまった。ブラッドが、安心し